

Japanese Literature—— 19



現代日本の文学

中野重治集

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜 夫

(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

19

中野重治集

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

昭和45年12月1日 初版発行

昭和48年2月1日 八版発行

著者 中野重治

発行者 古岡秀雄

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-1

郵便番号 145 振替東京 883

電話 東京(720)1111 (大田区)

印刷 大日本印刷株式会社

晩印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京
727-1600へお願いします。

© 1970 Printed in Japan

0393-164 618-1002

中野重治文学紀行

金沢 浅野川大橋河畔



金沢という町は片口安吉
とつて一種不可思議な町
つた。犀川と浅野川とい
二つの川がほとんど平行
流れていて、ふたつの川
両方の外側にそれぞれ丘
あり、ふたつの川の間に
う一つの丘があり、街全
は、ふたつの川と三つの
とにまたがってぼんやり
眠っている態であつた。

（「歌のわかれ」）





衛戍病院わきの急な坂をおりて行くとほとんど山のなかへはいったような谷間の細路になり、この細路の両側はいろいろな宗派のお寺の軒つづきになっていた。（「歌のわかれ」）

衛戍病院（現国立病院）わきの坂道。この坂道を下っていくと竹と寺の多い重治の下宿（当時八坂町・現東兼六町）がある。

大正8年、金沢市の第四高等学校に入学した重治は、はじめ時習寮で寮生活、ついで^懸町の若越義塾、八坂町の雲龍寺、小將町の法句寺、卒業時には古寺町の二階がりと、何度か下宿を移った。写真は旧八坂町下宿付近の孟宗林。「二階の部屋にいても夜っぴてはちゃんばちゃんという水の音がきこえていた。井戸も水道もないこの寺ではいまだに山水を使っていて、うしろの孟宗山から^樋を伝わってきた水が年中台所の中央の大きな井戸側のなかへしたたりたまっていた。」（「歌のわかれ」）



金沢市を流れる犀川の春

畑の端に榛の木が六七本並んで立ち、その向うが傾斜
になっているらしく、赤煉瓦の古風な建物の頭がその
わきから覗けていた。彼は畑を二つ三つまっすぐに踏
みこした。建物の姿がすっかりあらわれてきた。思い
もかけずそこに監獄が建っているのがであった。……赤
煉瓦独得の白い粉を吹いたような朱の色、桜並木の黒
ずんだ緑とそれの植わった土手の草の柔らかい緑、左
上隅の晴れた空、その下の村々と畑との横に重なった
線、特に桜並木の影が土手の草を明暗に染めわけて、
そのあやを絶えずちらちらさせているのが言い甲斐な
く美しかった。（「歌のわかれ」） 金沢刑務所







沖合はガスにうもれている

渚はびつしよりに濡れている

その濡れた渚に黒い人影が動いている

黒い人影は手綱を提げている

黒い人影は手綱をあげて乏しい獲物をた

ずねている

黒い人影は誰だろう

黒い人影はどこから来ただろう

獲物はいつも乏しかろう

部落は定めし寒かろう

そして妻子の間にも話の種が少なかり

そして彼の獲物は売れようか

彼の手にも銭が残ろうか

いいえ

彼は黙ってこの海岸を北へ北へと進む

だろ

（北見の海岸より）

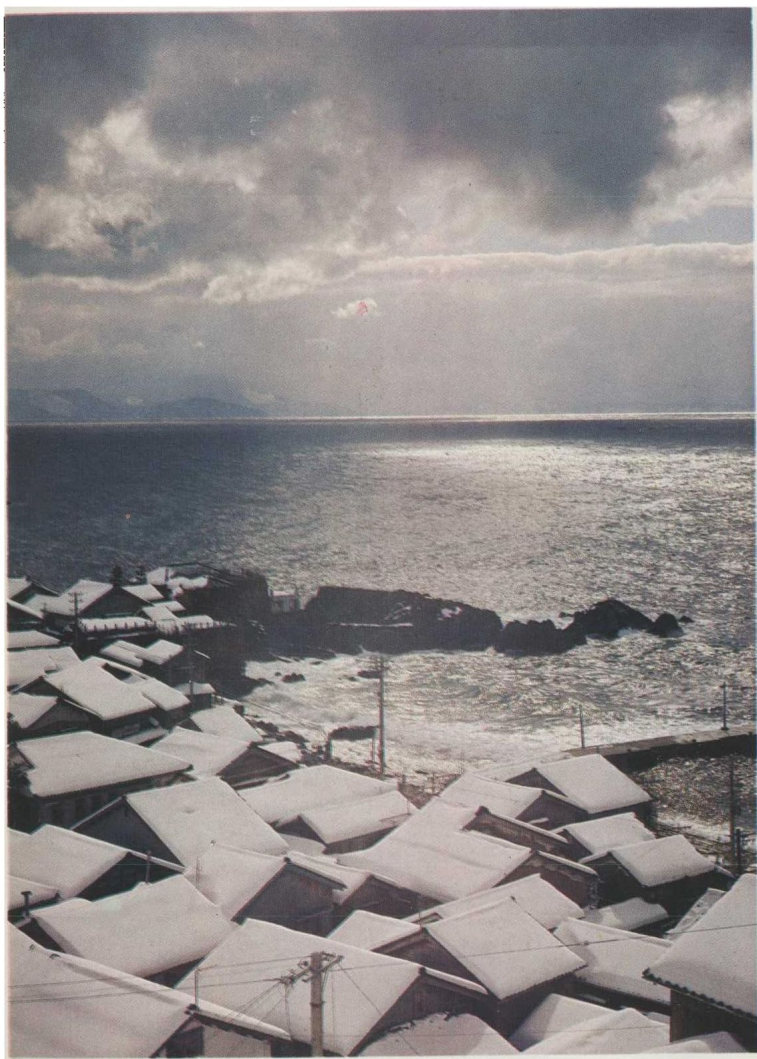
北海道北見・興部の海岸



ここにあるのは荒れはてた細ながい磯だ
うねりは遙かな沖なかにわいて
よりあいながら寄せて来る
そしてこの渚に
さびしい声をあげ
秋の姿でたおれかかる
そのひびきは奥ぶかく
せまった山の根にかなしく反響する
かんじょうな汽車さえもためらいがちに
しぶきは窓がらすに霧のようにもま
つわって来る

（「しらなみ」より）

右 ああ 越後のくに 親しらず市振の海岸……と「しらなみ」にうたわれた
親不知 下 冬の福井梅浦 暗い冬空がひろがり、家々は雪におおわれる





きくわん車

きくわん車

くろい

強いきくわん車

きくわん車

きくわん車

ひつばる

押してゆくきくわん車

きくわん車

きくわん車

トンネルへはいる

鉄橋へかかるきくわん車

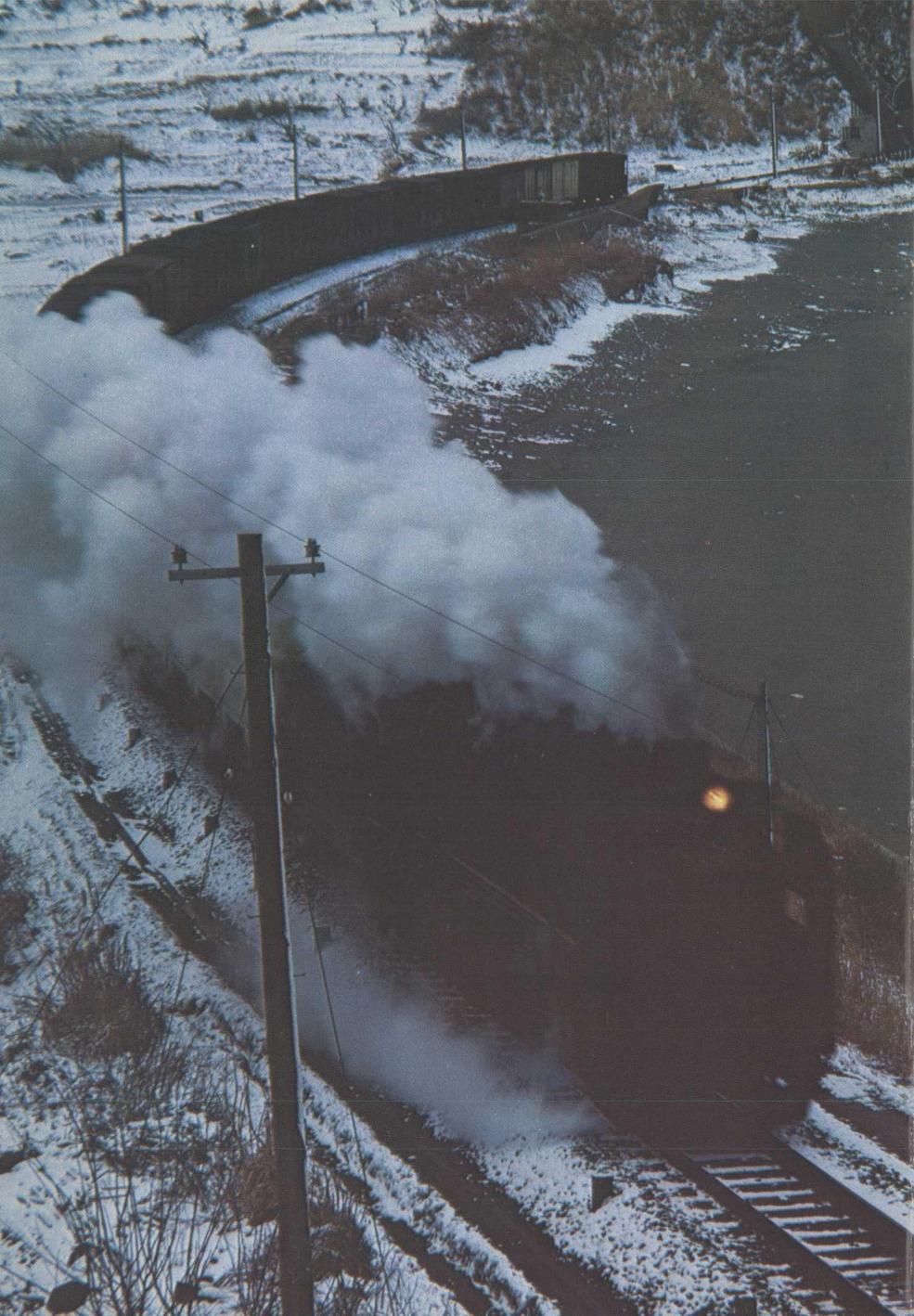
人をはこぶきくわん車

荷物をはこぶきくわん車

郵便を持つてゆくきくわん車

(「きくわん車」より)

冬の日本海・羽越線にて





私は、「もんかきや」という言葉をはじめて見た。
……あの紋というのは、あんなにして、一々人が
筆でかくものなんだろうか。何という芯^このつかれ
る仕事。それにしても、あんなことで商売が成り
立つのだろうか。この節は、紋つきなんというも
のはもうはやらなくなっているのだろう。それと
も、復活してきたんだろうか。復活してきたにし
たところで、とてもますますといったものではあ
るまい。
（「萩のもんかきや」）

萩市にあるもんかきや たんねんな、つつまし
い仕事が、今も女の人の手でつづけられている。

静かな城下町・萩

「それは、小さな、しずかな町だった。……家並が低い。」「萩のもんかきや」



